

俗に「三平皿」と称される輪花皿は、北西部と東部の2箇所をピークとする明確な二峰分布となる。「三平皿」は、鮭や鰯などの海産魚類を野菜などと一緒に煮込んだ煮物の一種を盛りつける深皿で、日常の食器として19世紀から中葉頃から北海道内で出土量が増加する（関根2009）。

土瓶は北西部を中心に分布する。土瓶は煎茶を煮出す煮炊具であり、湯飲み碗と組み合わせて使用されると考えられるが、分布状況からは湯飲み碗の分布との関連は見いだせない。

瓶類は北西部を中心に分布する。波佐見産の笹絵徳利と越後産の焼酎徳利がある。波佐見産の笹絵徳利は1升入りの酒瓶である。越後産の焼酎徳利は8合入りで、新潟から北海道に向けて万延元年（1860）以降に焼酎を詰めて輸出が開始されたとされる（松下ほか1978）。越後産焼酎徳利は19世紀代の漁場関係と推測される遺跡（斜里町オシネベツ川西側台地遺跡、苫小牧市弁天貝塚、根室市穂香川右岸遺跡）から大量に出土している。いずれにせよ瓶類の多くは焼酎又は酒瓶であることから、飲酒が北西部を中心に行われた可能性が考えられる。

以上をまとめると以下のように整理される。

- ①館城跡西半の地域では、北西部と中枢部に近い東部に遺物の集中がみられる。
- ②北西部では蓋付き碗や酒精瓶類が分布する。
- ③比較的高級品と考えられる肥前産の皿類（輪花皿を除く）の分布のピークは不明瞭である。
- ④碗類など小型の食膳具が中心である瀬戸磁器は北西部を中心に分布する。
- ⑤したがって、北西部は飲酒も含めた飲食の場として生活感の強い空間が広がる。
- ⑥相対的に、中枢部近い東部では生活感が薄い傾向となる。

9 陶磁器の出土量と構成比（図45、46、表7）

（1）産地別の出土量（図45）

瀬戸産磁器、肥前産磁器、波佐見産磁器、産地不明磁器、肥前産陶器、信楽産陶器、高取産陶器、越後産陶器、産地不明陶器に区分し、器種別の構成比を算出した。また、産地別の出土量もグラフ化して提示した。なお、点数は全て接合前の破片数である。

産地別に大きな割合を占めるのは、瀬戸産磁器、肥前産磁器、越後産陶器である。瀬戸産磁器と肥前産磁器は碗、皿、その他の食膳具で高い比率を示す。碗類は瀬戸産が多く皿類は肥前産が大半を占める。越後産陶器は前節で述べた焼酎徳利で、漁場関係遺跡などに比べると出土量比は少ないものの一定数量が出土している。

産地別にみると碗類の比率が高い瀬戸産磁器が最も出土量が多く、肥前産磁器が次ぐ。同時期の他の遺跡との比較が必要であるが、館城跡では陶器に対して磁器の出土量が多い印象を受ける。

（2）器種別の出土量（図46）

器種別では、碗、皿、壺・甕・瓶の順に出土量が多い。壺・甕類など大型の個体は相対的に破片数が多いことを考慮すると、個体数としては、碗皿類が圧倒的に高い比率で出土したといえる。

碗蓋と碗の出土数に大きな差がみられる。前節で考察したように、碗と碗蓋の分布範囲が異なり、蓋なしの碗が一定数量存在したことから、碗蓋と碗の数量には差があることは当然であるが、実際の比率よりも碗蓋の数量が少ない印象を受ける。小破片では碗と誤認された破片が多いのかもしれない。

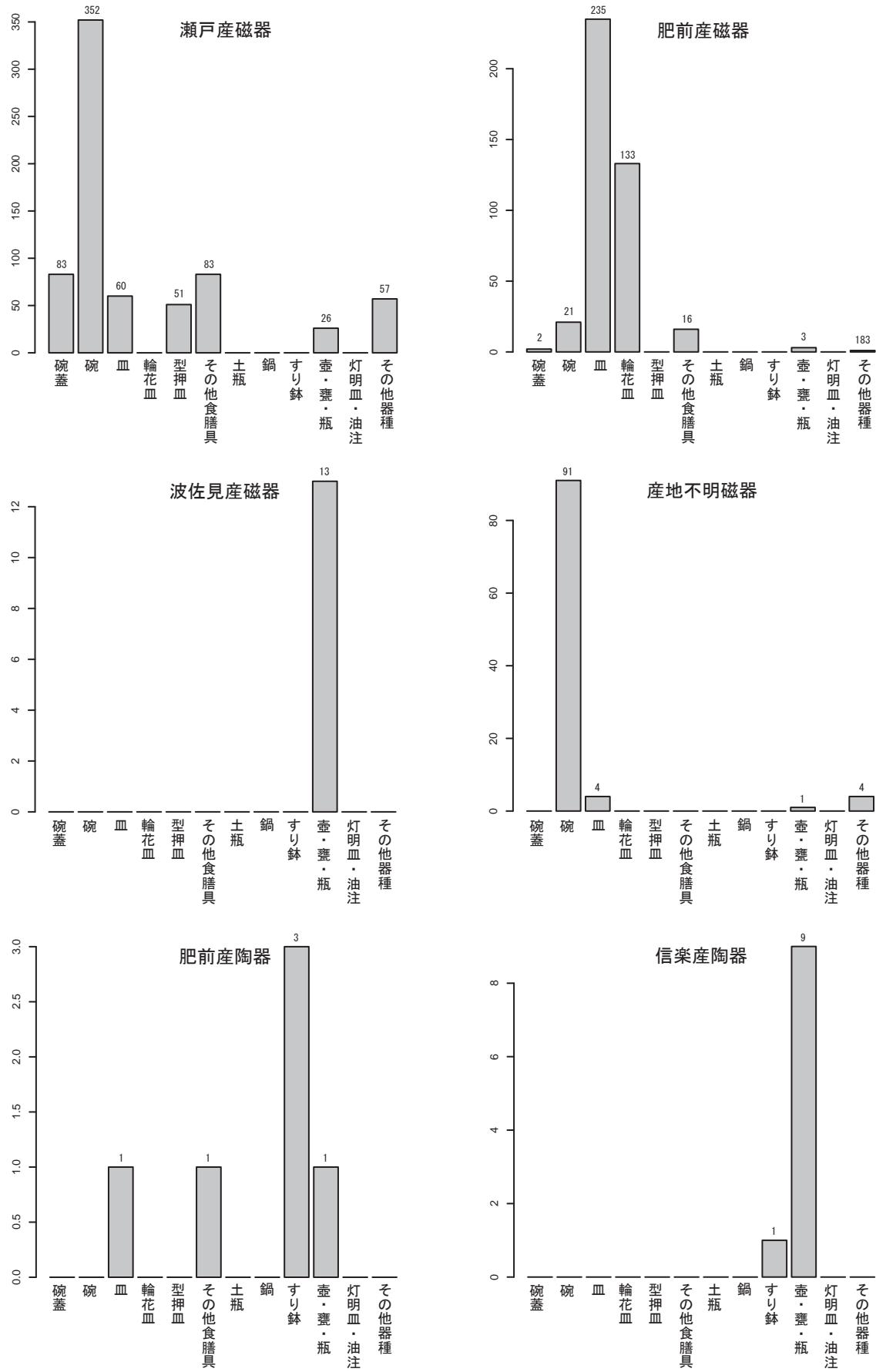


図45 平成17～24年度出土陶磁器構成比グラフ(1)

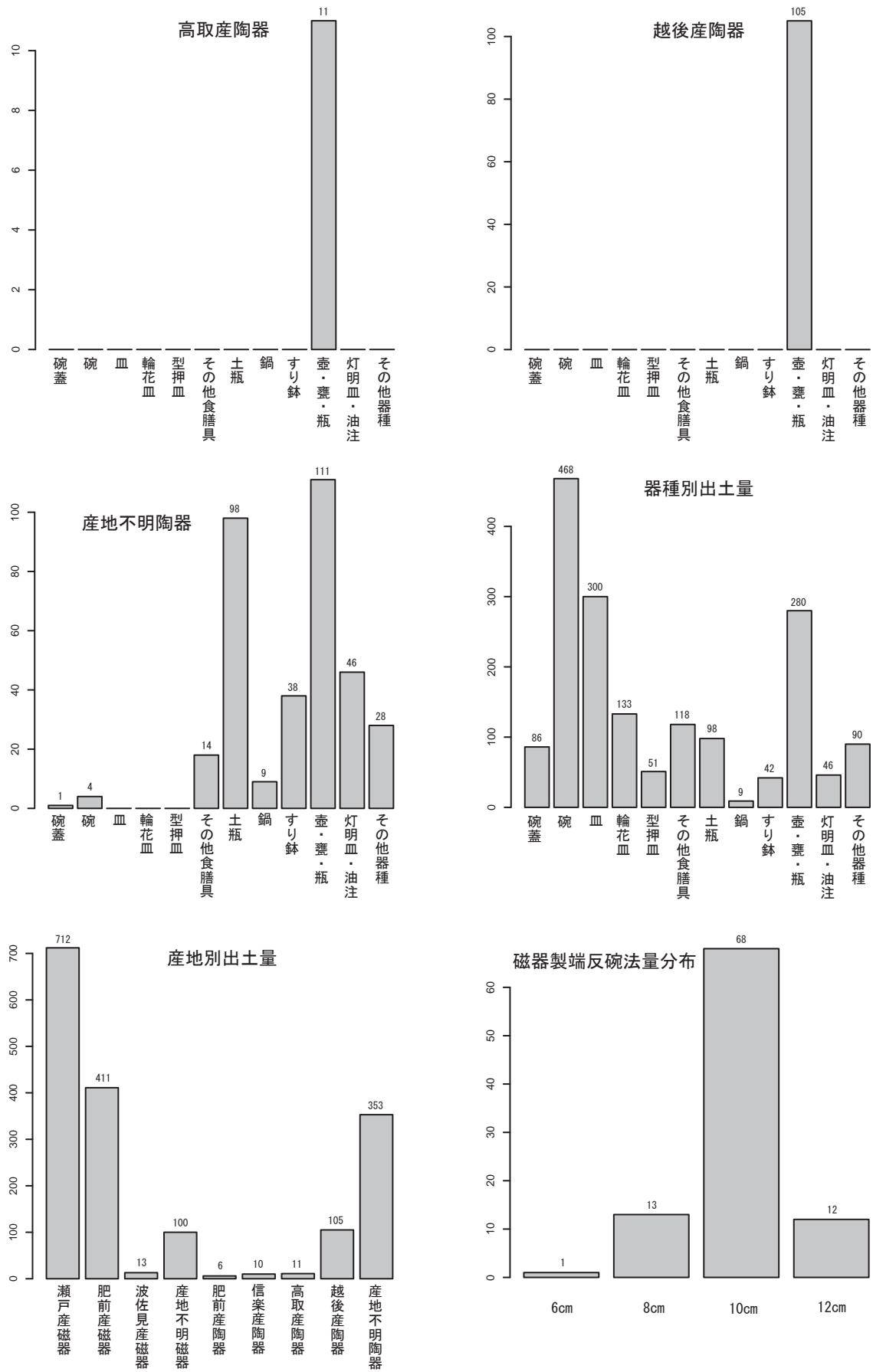


図 46 平成 17 ~ 24 年度出土陶磁器構成比グラフ (2)

(3) 磁器製碗の法量（図46）

「6cm」、「8cm」、「10cm」、「12cm」の4段階に区分した。「6cm」=<7cm、「8cm」=<9cm、「10cm」=<11cm、「12cm」>11cmである。

10cmと12cmは蓋付き碗の比率が高いと考えられるグループである。6cm、8cmは蓋が附属しない小型の湯飲み碗である。法量からみる限り、館城跡出土の磁器製碗は湯飲み碗よりも蓋付きの飯碗が多いといえる。

(4) 北海道内の陶磁器出土遺跡との比較（図47）

館城跡の陶磁器構成比の特徴について、他の遺跡との比較により明らかにする。

比較対象とした遺跡は、北海道内で19世紀代を中心に行なわれた白老町白老仙台藩陣屋跡、根室市穂香川右岸遺跡、苫小牧市弁天貝塚、別海町野付通行屋跡の4遺跡である。函館市五稜郭跡や松前町福山城跡、北斗市戸切地陣屋跡など幕府関係や松前藩関係遺跡は陶磁器構成比が明らかにされていないため比較対象としていない。

館城跡では、碗・皿類の比率が0.6を超えており、特に他の遺跡に比較して皿類の構成比率が突出している。館城跡の皿類は、他の遺跡で多く出土する輪花皿（三平皿）に加えて、大型の皿類が多く出土していることが突出した皿類の比率の高さとなっている。他の遺跡では相対的に壺・甕・瓶の比率が高く、穂香川右岸遺跡や、弁天貝塚、野付通行屋跡では出土量の6割以上をこれらが占める。弁天貝塚や穂香川右岸遺跡では特に越後産の瓶（焼酎徳利）の出土量が多く、壺・甕・瓶の比率の高さにつながったと考えられる。

(5) 考察

遺跡の性格別にみると、館城跡は藩主の居所、白老仙台藩陣屋跡は北方警備のための軍事拠点と警衛地の経営、穂香川右岸遺跡と弁天貝塚は漁場関係、野付通行屋跡は人馬継立などを行う交通の拠点である。このうち、穂香川右岸遺跡や弁天貝塚は松前藩や幕府などの権力との関わりが最も薄く、次いで幕府によって設立された野付通行屋跡、仙台藩が藩士を送り込み軍事・行政の拠点とした白老仙台藩陣屋跡は権力の関与が高いと考えられる。館城跡は、松前藩の新たな拠点として築造されたことから、これらの遺跡群の中では最も権力との関わりが強い遺跡と言える。

このような遺跡の性格の違いを踏まえると、館城跡の陶磁器構成比の特徴は以下のように整理できる。

- ①碗・皿類などの食膳具の高い構成比率は、陶磁器を用いる食事を頻繁に大人数で行う環境を示しており、公的な食事の機会の多い藩の拠点としての性格を示している。
- ②特に皿類の構成比率が高いことは、多人数の食事に用いられる大型の皿類が多いことを示し、儀礼的な食事=宴席機会の多さが想定される。
- ③壺・甕・瓶類の出土比率の少なさは、存続期間の短い館城では日常雑器であるこれらの器種の廃棄数量が少なかったことと、下層階級で好まれた焼酎の消費量が少なかったことを意味する。
- ④陣屋跡や漁場関係遺跡などと比較して館城跡の陶磁器構成比は特徴的であり、その特徴は藩主の居所と藩の拠点としての遺跡の性格に直結していると考えられる。

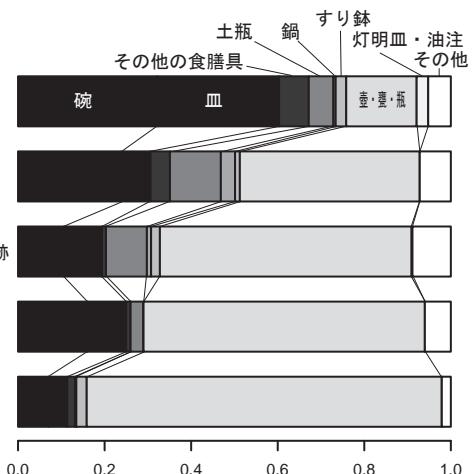


図47 陶磁器構成比の比較

表7 平成17～24年度出土遺物集計表

種別	器種	産地	法量	点数
磁器				1,236
	碗蓋			85
		瀬戸		83
		肥前		2
	碗			453
		瀬戸		341
		12cm		12
		10cm		60
		8cm		13
		6cm		1
		不明		255
		肥前		21
		10cm		8
		不明		13
		不明		91
	丸碗	瀬戸		9
	筒型碗	瀬戸		2
	皿			299
		肥前		235
		瀬戸		60
		不明		4
	輪花皿	肥前		133
	型押し皿	瀬戸		51
	合子	瀬戸		1
	合子蓋	瀬戸		9
	急須	瀬戸		1
	燭台	瀬戸		1
	仏飯器	瀬戸		1
	花瓶	瀬戸		1
	香炉	瀬戸		6
	段重			36
		瀬戸		22
		肥前		14
	鉢			44
		瀬戸		43
		肥前		1
	鉢蓋			8
		瀬戸		7
		肥前		1
	瓶			43
		瀬戸		26
		肥前		3
		波佐見		13
		不明		1
	紅皿	不明		3
	不明			50
		瀬戸		48
		肥前		1
		不明		1
陶器				485
	碗	不明		4
	碗蓋	不明		1

種別	器種	産地	法量	点数
	皿	肥前		1
	鉢			19
		肥前		1
		不明		18
	土瓶	不明		93
	土瓶蓋	不明		5
	灯明皿	不明		43
	油注蓋	不明		3
	瓶			111
		越後		105
		不明		6
	行平鍋			2
	鍋	不明		7
	肩付き	不明		2
	行灯皿	不明		1
	すり鉢			42
		肥前		3
		信楽		1
		不明		38
	甕			115
		瀬戸		3
		肥前		1
		高取		11
		不明		100
	壺			11
		信楽		9
		不明		2
	不明			25
土製品				84
	火鉢			4
	珪藻土			76
	不明			4
金属製品				73
	釘			18
	煙管			1
	鎌			1
	台ガンナ			1
	鍋			1
	錢			7
	板状製品			10
	不明			34
石製品				2
	硯			1
	砥石			1
木製品	木材			1
近代磁器				176
	碗			81
	筒型碗			5
	皿			60
	型押皿			1
	瓶			4
	不明			25

種別	器種	産地	法量	点数
近代陶器				10
	碗			2
	土管			8
ガラス製品				72
	ビール瓶			10
	瓶			27
	薬瓶			1
	ランプ油壺			1
	碁石			1
	ビー玉			1
	不明			31
プラスチック製品	不明			14
土器	縄文土器など			8
石器				10
	スクレイパー			2
	石核			1
	フレイク			7
自然石				3
総計				2,174